

編集後記

多根総合病院 副院長 小川 竜介

第11巻の巻頭言は瓦林先生からいただきました。「何のために論文を作成するのか」という多根総合病院医学雑誌の存在意義に関わる命題に対して、「書いてみなさい。そうすれば答えは自然と解る」と述べられています。本来、論文を執筆するということは、新しい知見、ドイツ語でいう *neues* (ノイエス) を世間に発表して医学の進歩に貢献することですが、大発見がいろいろな所にゴロゴロ転がっている訳ではありません。新発見でなくても、他施設で得られた知見を検証 (validate) する論文でもよく、例えば米国で登場した新しい治療法を大阪市西区の市中病院で試してみたら成績はどうだったという追試でも医学に貢献できる場合もあります。すなわち、治療成績は人種によっても環境 (医療体制) によっても異なる可能性があるため、その新しい治療方法は別の地域では有効性が低いかもしれないし、逆により有効な患者群 (サブグループ) が見つかるかもしれません。新しい治療法でなくても、現代医療においてはクリニカル・インディケータ (臨床指標) の開示が求められています。急性期脳梗塞を例にとると、脳血管内治療 (血栓回収術) の年間治療件数、来院から治療開始までに要した時間、治療成績などです。検査や診断部門では検査値の精度管理、放射線治療機器の精度管理などが求められています。これらを対外的に公開する場として多根総合病院医学雑誌が貢献できればと考えています。また、新しい気づきが込められた症例報告では、診断に結びついた普段見逃してしまいそうなポイントを読者が学んだり、稀少な合併症の経験を共有して今後の診療に役立てたりすることができます。編集責任者としては、最先端の臨床研究でなくとも、その内容から読者がなにか (自分が知らなかったこと) を学べる論文であってほしいと思っています。

巻頭言を読んで、自分の大学院時代を思い出しました。自分の初稿を先輩に渡してやり取りを何度か繰り返すうちに自分で書いた箇所は最終的にはほぼ全部削除され、実質的には先輩が書いた論文となりましたが、その過程で論理的な思考に触れることができました。これを2本日以降の論文で何回か繰り返すことにより科学論文が書けるようになります。先輩はきっと心の中では一から自分で書いた方が早いと思われていたでしょうが、これが後輩教育だと思って忍耐強く私の拙文につきあってくれた訳です。普段、医局ではその先輩は遊びも好きで祇園や新地に連れて行ってもらい社会勉強しましたが、大学院でその先輩が主導する研究グループに入れてもらってから学問的思考に接し、その緻密さに感服し、もう一生頭が上がらないと思いました。留学から帰国後に自分がグループ長になると、その頃には少し英語ができるようにもなっていたので、恩返しの気持ちで後輩の論文を (愛情を込めたつもりですが) 厳しく指導しました。投稿後の査読 (peer review) も大切な過程です。不慣れな読者のために少し解説すると、査読とは額面通りだと同業の仲間による審査という意味です。掲載可 (accept) または掲載不可 (reject) という判断を下す査読者 (reviewer, または referee) は、少し大袈裟ですが絶対的存在 (神) であり、投稿論文の命運を握っています。ルールとして神様には逆らえません。全く的外れな査読コメントを突き返されたときは腹も立ちますが、「わかりやすさ」が欠けていたのではないかと自省して、表現力 (英語力) が足りなかったので誤解を招いたかもしれないがこういうことが言いたかったと査読者に納得してもらえるように返事を書いて、その箇所を書き改める必要があります。査読者のすべてのコメントに網羅的に対応する必要があります。1箇所でも無視するのはルール違反です (修正しない/できないコメントに対しては理由を控えめに反論します)。また、論文では自分が重要だ (興味深い) と思ったポイントを強調する訳ですが、他人が見てもそのポイントに共感してもらえるのかどうかを査読コメントが直接的/間接的に気づかせてくれます。すなわち、独りよがりではない「わかりやすさ」と「客観性」が科学論文には重要です。編集委員・査読者は、たとえ掲載不可 (reject) と判断しても、より良い論文になって他の雑誌で掲載可 (accept) をもらえるようにコメントします (少なくとも私はそう教えられました)。査読を経て「わかりやすさ」「客観性」が増せば、より良い論文になっているはず。早い時期 (少なくとも初期臨床研修医?, 米国では学生時代からスタートする学生もいる) からこの辛い貴重な経験を積み重ねることが望ましく、学会発表だけでなく論文執筆にも精進してほしいと思います。将来、他施設に移るとき、海外留学するときに筆頭著者となった論文達が役に立ちます。多根総合病院の研修卒業生の論文がいつの日か一流英文誌に掲載されることを願っています。繰り返しになりますが、そのためにはスタートは早ければ早いほうが良いでしょう。個人的には、大学院生の指導から離れて20年以上経ちましたが、多根総合病院医学雑誌に編集責任者として (神としてではなく) 携わるようになって

て論文と格闘する日々が再びやってきました。編集部もできるだけ支援しますので、本誌では多職種の様々な人に論文を執筆してもらいたいと考えています。論文にはお作法があり、それらを学びながら執筆・査読を体験する中で、科学的な思考能力（独りよがりでない客観的な思考、事実を分かりやすく他人に説明する能力）が向上します。瓦林先生も巻頭言の結びで述べられていますが、さらに著者がその経験をもとに後輩の論文を指導していけば、KHSグループ全体の人材育成に繋がると考えます。

第11巻は総説、原著、症例報告、看護研究の区分で計12編が掲載されています。今回は耳鼻咽喉科より気管切開に関する貴重な総説をいただきました。他の論文もいずれも専門性が高い内容です。今回から初期研修医の先生にも投稿していただきました。例年と同様に、各論文にはeditorial commentsを添え、内容理解を深める一助としましたので、本編とともに末尾のコメントも是非ご一読ください。一部は院外の先生にお願いしました。多忙な中をコメント執筆に時間を割いていただいた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

今後、総説として掲載してほしいトピックスや執筆者のご希望がございましたら、編集部までお寄せください。第1巻以降のすべての論文がKHSホームページから電子版（PDFファイル形式）として閲覧、ダウンロードできます。第9巻以降の電子版にはフルカラーの写真/図表を掲載しています。

多根総合病院医学雑誌編集委員会

委員長：丹羽英記（院長）

副委員長：小川竜介（副院長）

委員：瓦林孝彦（副院長）／川村 肇（多根記念眼科病院 副院長）／森 琢児（外科）／
細川幸成（泌尿器科）／藤本直己（消化器内科）／青池太志（脳神経内科）／
濱澤良将（放射線診断科）／八木桂太郎（整形外科）／竹浦久司（医療技術部）／
森本明美（薬剤部）／大崎和子（看護部）

事務局：上野 梢（総合医局）／織田恵美（図書室）

多根総合病院医学雑誌

第11巻 第1号

2022年3月 発行

編集兼発行 多根総合病院（代表：丹羽英記）

大阪市西区九条南1丁目12番21号

〒550-0025 電話 (06) 6581-1071(代)

FAX (06) 6585-2757

E-mail ikyoku@tane.or.jp

(担当 上野, 織田)

印刷所 シグマ紙業株式会社

大阪市西淀川区御幣島5丁目12番24号

〒555-0012 電話 (06) 6472-1321(代)